

スカーレット・ウィザード 4

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

D	協	カ	口	カ
T		バ		バ
P	力	ー	絵	ー
		デ		イ
		ザ		ラ
		イン		ス
ハ	小	し	忍	
ン	牧	い	青	
ズ	雅	ば	龍	
ミ	伸	み		
ケ		つ		
		お		
		(伸		
		童		
		舎)		

目 次

1		7
2		46
3		76
4		95
5		120
6		152
7		181
8		209
あとがき		223

SCARLETT WIZARD

CAST

ケリー・クーア キング・オブ・バイレーツの異名を持つ一匹狼

の海賊、現在はジャスミンと結婚したためクーア財閥副総帥

ジャスミン・ミリディアナ・ジェム・クーア クーア財閥総帥

ダイアナ・イレヴンス ケリーの船の感応頭脳、船籍名はバラ

ス・アテナ

マックス・クーア クーア財閥の創始者、ジャスミンの父親

セシル・クーア ジャスミンの母親

ケネス・ゴールドマン クーア・キングダム of 船長

チャールズ・ブラッドリー クーア・キングダム of 整備長

メルヴィン・クラーク クーア・キングダム of 情報管理長

アーノルド・ベッカー クーア・キングダム of 医務長

コルト メルクリウスの艦長

イザドー クーア家の執事

プリステイン・アステル ジャスミンの第一秘書

ヘレン 広報・外観担当リーダー

ペパーミント ヘアデザイナー及びメイク担当

グレース 衣装担当

バイオレット 衣装担当

ジャック・シモンズ エネルギー機関・宇宙船造船部門最高責任者

パトリック・サンダース 銀行・証券・信販会社などの金融部門

者

統轄最高責任者

ジョン・ブライアン 情報回線部門最高責任者

スタニスラス・ワイリー ゲート管理、駅（ステーション）関係

最高責任者

リチャード・ジェファークソン 惑星開発・都市計画部門最高責任者

者

アロウェイ・ハワード 警備保安部門、武器開発部門最高責任者

ジェームス・ウェインズバーク 稀少鉱石、稀少天然物関連最高

責任者

ジンジャー・ブレッド 美人映画女優

アレクサンダー・ジェファークソン リチャードの息子

ユリカ・コーエン 趣味で電算機を扱う農学系博士

クーア・キングダム クーア財閥の豪華船

フェリクス クーア・キングダム of 感応頭脳

クインビー ジャスミン専用機、通称・深紅の空飛ぶ棺桶

メルクリウス クーア・キングダム of 護衛艦

ゼウス シティのすべてを統括する人工脳

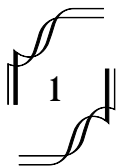
クライスト ミュージシャン、趣味でアレンジャーをやっている

ギリアス 海賊団の首領

スカーレット・ウィザード

④

yoku minakereba kiga tsukanaideyouna mise datta.
michiwo ippon hasurereba kankodokyaku ya suikyaku ga yukikan
odoorida.soushita otokotachino aiteni suru onnatachinino kandaikai koega
nigiyakani tatteiru.
sonna kansouni mienita rojino usuyogoretakabeni tobiraga
ichimai,denshokuna mochiron kabanmo detenai.tada,koshokusousentosita
toiridakega potsuunento tatteiru.



ギリ阿斯海賊団の旗艦であるギリアスの乗艦には、
《マーヴェラス》の名が付けられている。

その《マーヴェラス》の艦橋は二十センチ砲の威力を間近に見て仰天したものの、誰もジャスミンの攻撃を深刻には受け取らなかった。

何と言っても戦力が違いすぎる。

たった一機で向かってきた相手に対し、こちらは五万トン級から二十万トン級の八隻から成る艦隊だ。命中すれば戦艦をも撃沈できる武器は驚異には違いないが、そんな大物を持つているとご丁寧に示してくれたのだ。それなら対エネルギー防御によって、その物騒な武器を無力化することができる。

そうやって安全な甲羅を纏ったギリ阿斯海賊団は、クインビーの性能に驚嘆すると同時にあざ笑った。

「馬鹿げたら。さすがはクア財閥と言うべきなんだろうが、あんな蚊トンボみたいな機体にあんな超大物乗っけてどうするつもりだ？ 使いこなせるわけがねえ」

何故使いこなせないのか。

戦闘機の役割はその身軽さを活かして敵陣営を攪乱し、時に対エネルギー防御の内側にまで入り込んで敵に損害を与え、撃墜される前に離脱することにある。

戦闘機は燃料補給式の宇宙船だから、燃費が良く、航続距離が長く、加速性能も高ければ高いほどいい。従って搭載する武器は対戦闘機戦用の小口径レーザー砲か、一発大物狙いのミサイルと相場が決まっている。

一方、二十センチ砲は超大物であるだけに、当然、重量もある。第二弾を撃つまでの時間差もかなり生じる。こんなものはよほど頑丈かつ大型の戦闘艦か、攻撃衛星が持たなければ効果を發揮しない。

これを戦闘機に搭載しても、効果があるとすれば最初の一発くらいのものだ。

つまり、武器の性質とそれを搭載している兵器の種類とがちぐはぐだ、と海賊たちは笑ったのである。

大型戦艦と戦闘機が共同で戦闘に当たるのはこのせいだ。戦闘機が対エネルギー防御ぎりぎりに接近——あるいは奇跡的な手腕を誇る撃墜士でもいれば、防御の内側にまで侵入可能かもしれない。そうして敵艦に砲撃を浴びせて本隊の戦力を少しでも削ぎ、あわよくば敵陣営を守っているスクリーンの発生装置を破壊する。そして敵艦が丸裸になったところに砲撃をお見舞いするというのが艦隊戦の常道だ。

しかし、実際の戦闘ではなかなかこうきれいには決まらなかった。互いの戦力が拮抗していればなお

のこと、相手の手の内も読めることになるからだ。

戦闘機は敵戦闘機や敵艦の掃射に阻まれて本隊には近づけず、戦闘機同士のドッグ・ファイトに終始することが多いのだ。もちろん、そうした迎撃網をくぐり抜けた戦闘機の幸運な一撃によって、戦況が大きく左右される場合もあるが、そんな例は極めて稀である。

迎え撃つ側にとっても戦闘機の実在は要注意だが、相手が一機だけなら話は別だ。クインビーがどんなに速くても、探知機に捉えられないほどではない。接近するのを待つて機銃掃射かレーザーシャワーを浴びせかければ割と簡単に片が付く。追尾機能付きのミサイルを使えばもっと確実だ。

ただし、そんなものを命中させたら機体は木っ端微塵に砕ける。当然、操縦者も死亡する。

今回に限ってはそれは困るのだ。

首領のギリアスは指令席で低く唸っていた。

「あの女がああ若造の身代金を払ってくれるんだ。

殺しちゃったんじゃ元も子もねえ」

ジャスミンが死ねばケリーがクーア財閥総帥だが、クーアの要人たちはそのケリーのために身代金は払うまいと、ギリアスは踏んでいた。どこの馬の骨ともわからない、ジャスミンのほうが一方的に惚れ込み、周囲の反対を押し切って結婚した男である。

財閥関係者にとつてはむしろ死んでくれたほうが好都合のはずである。

従つて、ジャスミンを殺すわけにはいかなかった。だからといって二十センチ砲の直撃なんていう、物騒な身代金を支払われるのはなおごめんだ。

「こっちからも戦闘機を出せ！ 全機発進だ！」

海賊団にはその用意もある。豪華客船が護衛用に搭載している戦闘機の相手をするためでもあるし、同じ海賊と戦うときのためでもある。また、海賊であるだけに、その腕は確かなものだ。

「ただし、間違つても撃墜はするんじゃないぞ！ あの女は大事な金蔓だ！ 必ず生きたまま俺の前に

連れて来い！」

と厳命した。

難しい注文だが、戦闘機を仕留めるには同じ戦闘機がもっとも適している。そして、空中戦なら数の多いほうが優位に決まっている。

ギリアス海賊団の有する戦闘機は全部で十六機。多勢に無勢だ。

これだけの数で一氣に襲い掛かれれば相手を行動不能にすることも、操縦者を生け捕りにすることも、決して不可能ではないはずだった。

海賊の彼らは軍のような規律に縛られなくても、略奪という目的のために一糸乱れぬ連携を見せる。

見事な編隊を組んで、たった一機の赤い戦闘機に接近した。

その間も、探知機が捉えた相手機の情報編隊に送られてくる。

見たこともない機体だ。戦闘機としてはずいぶん大型だ。しかも二十センチ砲をぶっ放してくる。

「クーアの試作品か？ 妙なものを作ったもんだ」

「油断するなよ。ど素人^{しろうと}の女が飛ばしてるとはいえ、他にも何か隠し持ってるかもしれないぞ」

海賊団の戦闘機編隊は用心しながらクインビーに接近した。すると、これだけの数を相手にするのは分が悪いと思ったのか、クインビーは方向転換して離脱しようとした。しかも、機体のどこかに異常が発生したのか、今までのような加速は出ていない。

追う編隊にとっては好都合の展開である。難なく後ろを取った。

戦闘機戦の勝敗は相手の背後を取れるかどうかで決まると言っている。この位置を取ったものが勝利するのだ。しかも、追う立場の海賊は総勢十六機の大編隊だ。どうしても料理できる。

しかし、彼らは知らなかった。

クインビーがどんな戦闘能力を持っているのかも、その機体を操っている操縦者のことも、あまりにも何も知らなかった。

十六機の編隊がクインビーの背後につくと同時に、彼らの探知機が一斉に警戒音を発したのである。

前方を逃げる機体に砲撃寸前のエネルギー反応を感知したと告げるものだった。しかし、悲しいかな、追う者達にはその意味がわからなかった。

クインビーが逃げる先に砲撃しなければならぬようなものは何もなかったからである。

「エネルギー反応？」

「どこを狙っているんだ？」

そんな会話を交わした直後だった。

編隊の実に半数がクインビーの直撃を受けて吹っ飛んだのである。

「何だ?!」

生き残ったものが眼を剥いたのは当然だった。

素早く編隊を崩^{くず}して散開する。

そこへ容赦のない第二弾が襲いかかってきた。

暗い宇宙を切り裂いて彗星^{すいせい}の尾のように鮮やかに二十センチ砲の軌跡が伸びる。しかし、かろうじて

生き残った海賊機のほうが早かった。

何とか旋回してこの恐ろしい攻撃から逃れたが、それは海賊機の技倆ぎりょうが勝っていたためではない。単なる運の良さに過ぎない。生き残った者達は一斉に総毛立ち、蒼白になった顔で呪いの声を発した。

「なんなんだ、あいつは!」

「巡洋艦じゃないんだぞ! どうやって撃った!」

身軽さと高速移動が身上的戦闘機は、通常、前方攻撃しかできない。だからこそ確実に仕留めようと思つたら背後から攻撃するのが定石じようせきになっている。

それなのに後ろを見せて逃げながら、追つ手に砲撃をぶちかましてくる。これは間違つても戦闘機に為せる業わざではなかった。軽巡洋艦か、艦隊戦せんがりの殿を務める駆逐艦隊のすることだ。

動転して右往左往する海賊機に見知らぬ女からの通信が入ったのはこのときである。

「無理しないで逃げたほうがいいわよ」

悪戯いたずらっぽく笑っている、甘く豊かな、なめらかな

アルトの声だった。姿は見えなくても、たいへんな美人が話しているのだらうと想像できる声だ。

「あれは戦闘機とは言えない代物よ。宇宙そうちを飛ぶ砲台なのよ。連射可能、全方位砲撃可能な二十センチ砲に、一・八V Lヴィーエルの高速で飛び回るエンジンと操縦席をくつつけてあるんだわ。あなたたちがどうあがいたところで勝ち目はないわよ」

ダイアナがこんなことを言つたのは海賊機を攪乱するためである。最初の一撃が決まつたと言つても八対一の差は大きい。人間が動かすものである以上、操縦者の動揺は常に隙に繋つながる。そして、その隙は必ずジャスミンを優位に導くはずだった。

しかし、そんな援護は無用だった。ジャスミンは元より残りの八機を見逃すつもりなどなかった。

海賊達がど素人と侮つたクーア財閥の女総帥は、かつて精鋭揃いの連邦宇宙軍に於いて、前人未到の戦闘記録を打ち立てた撃墜バイロイ王である。

方向転換と同時にさらに二機を屠ほふった。

残り六機を正確に探知機に捉えながら、赤い髪の女王は不敵に笑って愛機に話しかけていた。

「さあ、行こうか」

自分の周りにある機械は常に彼女の相棒だった。

もちろん、それらは生命を持たない器物だ。誰が使っても同じ道具だ。

必要とあらば乗り換える、故障したり寿命が来たりすれば切り捨てるものだ。そう割り切りながらも、単なる機械ではないかと軽んじることはできない。それを用いて戦いに出る以上、身体を預ける機体は自分自身の一部なのだ。この心得を持たないもの、扱っている機械の特性や個性を理解して一体になれる感覚を持たないものには、危なくて単独行動はさせられない。

軍にいた頃、ジャスミンはずいぶんいろいろな機械と組んできた。いつも戦闘機だったわけではない。時には軍艦であり、機甲兵^{きこうへい}だった。情報端末だったこともある。最初から相性のいい優等生のような機

械もあれば、やたらと愚^ぐ図^ずる、最後まで手の掛かる機械もあったが、ジャスミンはそうしたものたちといつも上手につきあってきた。

だが、人間に能力の限界があるように、機械にもそれがある。群を抜く身体性能、戦闘能力を持ったジャスミンには、連邦軍の誇る最新鋭の戦闘機でも満足できなかった。やりたいことの半分も実現することができなかった。

だから、クーアの財力と技術にものを言わせて、オリジナルの機体をつくった。自分の体格、能力に最初から合わせた、その可能性を最大限にまで引き出せる唯一の機体をだ。

結果、できあがったのは他の誰にも動かせない、乗りこなすことのできない物騒な深紅の刃^{やいば}だった。

しかし、その機体はジャスミンにとっては初めて、本当に命を預けられる相棒だったのである。

残り六機に機首を向けて襲いかかりながら愛機に向かつて威勢良く声を掛ける。

「気張れよ、二代目！　これがおまえの初陣だ！」

ジャスミンの気合いに赤い優美な戦闘機は見事に応えたのである。

戦闘機戦に掛けては、あのケリーが密かに舌を巻いたほどの手腕を誇るジャスミンだ。数で勝つても、たかが田舎海賊の搭載機など相手にもならなかった。指令席のギリアスは大事な手持ちの駒が次々と撃墜されていくのを、半ば呆氣にとられて、また半ば怒り狂って見つめていたのである。

「こっちから手出しはできないと思って好き放題をやがって！」

もともとが短気で激しやすいギリアスだ。同時に、計算高くもある。こんなふざけた真似を許すくらいなら、この際、身代金は諦めても仕方がないかと思つた。お宝ならケリーの《門》がある。

あの若造の記憶を丸裸にしてやれば、身代金を取り損なつたとしても、充分、お釣りが来る。

「全艦、一斉砲撃だ！　あのこざかしい蚊トンボを

打ち落とせ！」

ギリアスが命じた途端だった。

明らかな衝撃とともに非常警報が響き渡つた。

「医務室・及び・武器庫に爆発・確認。武器庫には誘爆の・恐れがあります。隔壁を・閉鎖します」

ギリアスの船の感応頭脳はあくまで冷静に状況を述べたが、人間のほうはそこまで冷静ではいられなかった。武器庫はともかく、医務室で爆発とは、普通では考えられない事態である。しかも今そこには宝の山につながる捕虜を捉えているはずである。

「あの若造はどうした！」

血相を変えたギリアスの問いに答えられるものは誰もいなかった。内線を使って呼びかけようにも、医務室周辺の区画はすでに交信不能になっている。

万が一にも死なせるようなことになつては一大事である。ギリアスは医務室の近くにいた部下達に様子を見に行くようにと、破鐘のような声で命じた。

通常、船内に異常が発生すると、感応頭脳は安全

確認のため、乗組員に機関停止を求める。しかし、《マーヴェラス》は例外だった。その感応頭脳の名前はTRICKY（意味は『故障しがちな』である。皮肉と逆説的な自負を籠めたクライストの命名だ）。独自にアレンジされたトリッキーは現在の状況を分析して、推進機関の停止はできないと判断した。

この船は海賊船である。しかも現在は一応、交戦中である。足を止めることなど論外だった。

一応というのは、とくに片が付いているはずの戦闘だからである。ギリアスの乗る司令船を含めて八隻の戦闘艦と十六機の戦闘機に対し、相手は五万トン級船が一隻と戦闘機一機だけだ。

ところが、現実には、そのたった一機の戦闘機に、手持ちの搭載機が次々と撃墜されているのである。

さらに航宙士が悲鳴を上げた。

「親分！ 五万トン級の船が急接近してきます！ 速度、速度はーおい、冗談じゃねえぞ！ 何かの間違いじゃねえのか!？」

「はっきり言え！」

「へ、へい！ 速度――二・五V^{ヴァイエル}L！」

さすがにギリアスも耳を疑った。

宇宙船か、それは？ と思った。

クインビーの一・八VLでさえ充分に異常である。連邦軍が誇る最新型の戦闘機さえ凌駕していることになる。だが、そこまでなら、驚きではあるが、あのクエア財閥が開発した機体ということで納得がいく。

しかし、二VL以上の加速を発揮する船となると、不可能の域だ。そんな船はまだ夢物語のはずだった。この宇宙のどこを探してもそんな船は存在しない、し得ないはずなのだ。

ギリアスはケリーのこと、その船のことも何も知らなかった。キング・オブ・パイレーツの持ち船――海賊仲間が皆《クレイジー・ダイアン》という愛称で呼ぶその船は、中央銀河最速の海賊船である。

ただし、普通はここまでの速度は出さない。ダイ

アナは通常、自分自身の最高速度を、戦闘機と同じ一・六四Vに抑えている。

それ以上の速度を出すことも理論的には可能だ。

少なくともダイアナは可能にしていた。ただし、減多にやらないのにはわけがある。それだけの高速度を維持しながら制御を確立することは至難の業だ。慣性相殺に至ってはもっと難しい。加速を実現すること自体は可能でも、まず操縦者の肉体が、さらに船体そのものがその速度に耐えられなくなる。

自らの加速で自身がばらばらに分解したのでは眼も当てられない。

しかし、今のダイアナはその禁忌を犯していた。

彼女の操縦者は十分で来いと言った。それ以上は待たないと言ったのだ。

その言葉に応えるため、禁断の枷を解除して、一直線に《マーヴェラス》を目指す。

もちろんそのまま突入したのでは合流どころではなくなってしまう。加速以上に急激に減速した。

あつという間に現れて戦闘宙域に入ってきた船に、《マーヴェラス》の艦橋は一人残らず絶句した。

首領のギリアスも例外ではない。

人間、信じられない事態に遭遇すると、とっさに判断に詰まるものだ。ギリアスにとつての常識——宇宙船とはどんなに速くても二V_{ヴェル}Lの速度を超えて飛ぶことはあり得ないという絶対的な原則が、目の前であつさり破られたのである。歯ぎしりした。

しかし、馬鹿正直に正面から向かってくるなら、どうとでも対処できる。これに対しても一斉砲撃を指示しようとしたとき、第二の衝撃が船内を襲った。

明らかな爆発現象である。

「今度は何だ!？」

苛立ちと激怒のあまり泡を吹きそうなギリアスの疑問に応えたのは起動した内線だった。

青ざめた表情を血で汚した部下が訴えてくる。

「親分! あいつが、あの野郎が暴れ回ってます! 増援を寄越してくだせえ! 手が着けられねえ!」

何を言われたのか一瞬わからなかった。

あの野郎とは医務室に捉えてあつた若造のことか
とようやく思い当たつたギリアスは血相を変えて叫
んだのである。

「馬鹿なことをぬかすんじゃない！ 生かしたまま
取り押さえろ！ 絶対に殺すんじゃないぞ！」

「それこそ冗談じゃねえ！ 今すぐ叩つ殺さなきゃ
この船はあの野郎一人に沈められちまいますさあ！」

「てめえら！ それでもギリアス海賊団の一員か？
たつた一人に何を手こずつていやがる！」

しかもその捕虜は片目を奪つた上、さんざん痛め
つけたはずである。今はろくに動けないはずである。

そんな男一人を相手に、名にしおうギリアス海賊
団が万が一にも手こずつたりするなど、あつていい
ことではないのだ。

しかし、ギリアスが叱責する傍からも内線からは
激しい銃声と悲鳴が響いている。画面に映っていた
部下の顔が血まみれになつて吹っ飛んだ。

「どうした!? 返答しろ！」

相手が応えられないことは百も承知でギリアスは
喚いた。何が起きたか認めたくなかつたのである。

ケリーは弾倉が空になつた銃を投げ捨て、腰から
新たな一丁を引き抜いていた。その動作の前には見
事なコントロールで手榴弾しゅりゅうだんを放り投げてゐる。銃
を持ち換える隙を狙おうとした海賊達は慌てて区画
の陰に逃げ込むはめになつた。

通路を振動させるほどの爆発が収まるのを待つて、
追つ手の海賊達が顔を覗かせたときには、ケリーの
姿はどこにもない。

「野郎！」

殺気だつた海賊達は勢い込んで後を追つたものの、
ケリーは追つ手のその行動をちゃんと予知していた。
戦闘において優位を決める三つの要素がある。

数と、場所と、攻撃力だ。

敵と味方にどのくらい兵力の差があるか。戦場と
なつた場所はどのくらい有利に使えるか。手持ちの

武器は敵に比べてどのくらい攻撃力で勝^{まさ}っているか。

接近戦なら、これらの要素で勝負が決まる。

今の状況を見ると、ケリーは孤立無援であるのに
対し、敵は数え切れない。場所も敵の船内、武器も
ほとんど同じものを使っている。圧倒的にケリーが
不利だ。

だが、ケリーは少しも絶望してはいなかった。

人間同士の接近戦なら、どんなに不利な状況でも、
勝てないなんてことは絶対でない。

ましてや海賊達にはケリーを殺せない理由がある。
生きた地図を殺してしまつては、お宝を取り損ねる
恐れがある。さらに当然の心理として、自分たちの
船を傷つけることも躊躇^{ちゅうちよ}するはずだ。逆にケリー
にとっては出くわす者すべてが敵である。何の遠慮
もない。ばんばん実弾を撃てる。

敵は多数。こちらは一人。しかも姿を発見されて
しまっている。この状況で敵に冷静な行動をとらせ
たら、それこそ負けだ。

勝利するにはできるだけ騒々しく動いて敵を攪乱
することだ。敵の動きを読むのではなく、こちらの
思惑どおりに誘導するのである。

予想通りに敵が立ち止まり、そして突撃してくる
気配を感じて、ケリーはひっそりと笑った。

一区画先で身をひそめて待ち、追っ手が無防備に
突撃してきたところを飛び出して狙い撃ちにする。

あつという間に五人が倒れた。海賊達には発砲の
暇さえ与えない早業だった。さすがに追っ手が怯^{ひる}ん
だところにもう一度、手榴弾をお見舞いする。

派手な爆発音が響いた。

《マーヴェラス》の武器庫には強力な武器や爆弾が
たくさんしまわれていた。ケリーはそれらを無断で
持ち出し、本来の持ち主に向かって大盤振る舞いを
しているわけだ。

数度の爆発とケリーの射撃からかうじて逃れた
海賊達は、彼の妻を相手にした仲間がそうしたのと
同じように、激しい呪いの声を発したのである。

「あ、あの野郎、正気か!? ここをどこだと思つて
いやがる!」

「いかれてるぜ! 死ぬ気か!」

宇宙船内で銃器や爆発物なんかを使つたらどんな
事態を招くか、星の海を渡るものなら誰でも知つて
いることだ。あの男も仮にも海賊を名乗るからには
その危険性に気づいていないはずはない。事実、船
内にはけたたましいくらいの警報が鳴り響いている。
それなのにあの男はまるで構いなしに銃を使い、
花火に火をつけるような気楽さで爆弾を使っている。
現状がわかつていないとしか思えなかった。

「まさか、この船と心中する気じゃねえだろうな」

恐ろしい可能性に、追う立場のはずの海賊達が、
ぞつと立ちすくむ。

それだけではない。海賊達が何とも形容しがたい
恐怖と疑惑を感じたことがもう一つある。

あの男は仲間を持たない海賊だと聞かされている。
つまり、操縦を専門にする人間のはずだ。しかし、

この戦いぶりはまるで熟練した兵士のそれだ。

数はこちらのほうが圧倒的に多いのに、あの男は
たった一人で無造作に行く手を蹴散らし、追つ手を
片づけている。初めて歩く未知の船内のはずなのに、
《マーヴェラス》の内部構造を熟知しているとしか
思えない動きで巧みに身をかわしている。

もちろん、海賊船の操縦者がまともな人間である
わけがない。多少は銃器の扱いや戦闘に慣れていて
当然だろうが、腕っ節ならギリ阿斯海賊団も相当な
ものだった。でなければ海賊などやっていられない。
本職の軍人と戦つても引けを取らない自信がある。

そのギリ阿斯海賊団の戦闘員を多数相手にして、
あの男はまだ倒れない。こちらの攻撃をかすらせも
しない。常に自分の身を優位に置き、有利に戦闘を
進めている。これは間違いなく専門の訓練、それも
恐ろしく高度な戦闘訓練を積んだ人間のすることだ。
海賊達は殺傷能力の低い衝撃弾を使っていたが、
それではとてもとても対抗できない。相手は平気で

実弾を撃ってくる。しかも、狙いは正確無比にして恐ろしく速いときている。

気がつけば仲間の屍しかばねばかりが増えていることに恐怖した海賊達は艦橋のギリアスに訴えた。

「親分！ だめだ！ あの野郎、むちゃくちゃだ！ 迫撃砲でも使わなきゃ止められねえ！」

その泣き言を情けないと叱ることはギリアスにはできなかった。怪我人と油断したとしても、一人を取り押さえるには時間が掛かりすぎている。すでに尋常ならざる被害を受けている。

それでも食いしばった歯の間から唸った。

「……そんなはずはねえ。あの眼なしで、あの機械の眼なしで、あの野郎にこんな真似ができるはずはねえんだ！」

すると、笑いを含んだ声がその疑問に応えた。

内線から流れてきた声だった。

「その台詞を聞いたら彼はきつとこう言うだろうな。『おまえは算数もできないのか。俺には眼が二つあ

るんだ』とね。照準を合わせるのに両目は必要ないだろう？」

「クライスト！ 貴様いったい何をしていやがる！ さつさとあの蚊トンボを黙らせねえか！」

「それは無理な注文だ。何しろあの機体には感応頭脳がない。いくらわたしが共和国一の天才でも、手の出しようがない」

掛け値なしの事実だったが、その厳然たる事實はギリアスをさらに激昂げつこうさせたようである。

「ふざけるんじゃないねえ！ 穀潰こくつぶしめ！ 言い訳ならちつとはましなものを考えやがれ！ そんなものが宇宙を飛べるわけがねえだろうが！」

「非常に不本意ながら、わたしもそれだけはきみと同意見だ。しかし、現実にもそこを飛んでいるものを否定しても意味はない。いいか、共和国一の天才アレنجジャーであるわたしの誇りに掛けて断言する。あの機体は感応頭脳を搭載していないんだ。恐らく電算機だけで飛んでいるんだろうが、操縦者は驚く

べき腕と度胸の持ち主だ」

「いいか、それこそ耳の穴かっぽじってよく聞けよ。あれを飛ばしているのはクーア財閥の女総帥だぞ！おまえの言うことが本当なら大の男だつて持て余す代物だ！お嬢さん育ちの女なんかにそんな機体が扱いきれるとでも、まさか本気で思つてゐるわけじゃねえだらうな!」

激怒がギリアスの舌の機能を奪い、ろれつまで怪しくなつていたが、この怒号にクライストは感嘆の声を発することゝ応えた。

「なるほど！それでわかつた。あのキングが俗に言う逆玉の興ぎやくだまなんかに乗るとは、いやはや彼にも似合わない陳腐な趣向だと思つていたが、大企業ちんぷの総帥ではなく、優秀な戦闘機乗りと結婚したのだとすれば納得がいく」

あんぐりと開いたギリアスの口がふさがる前に、クライストはさらりと言つていた。

「そうそう。言い忘れていたが、わたしはこの辺で

失礼させてもらふことにするよ。きみの巻き添えは食らいたくないのでね」

「何だ!?」

「この船はもうじき沈むと言つてゐるんだよ。当然、きみも船と運命をともにすることになる」

ケリーに両手足と腹を撃ち抜かれたクライストは、身動きできない身体を自動機械オートマドンに運ばせていた。

仰向けに寝た状態で、四台の自動機械にそれぞれ肩や手足を支えさせるという何とも滑稽こっけいな格好で、通路を進んでいる。

本来《マーヴェラス》の、厳密にはトリッキーの手足として働くはずの自動機械が何故クライストの命令に従つてゐるかと言へば、そうなるようにアレンジしたからに他ならない。

両手が使えないので、クライストは頭に装着した小型の通信機で話していた。

醜みにくい男の顔は見たくないという彼一流の信念に基づいた音声のみの会話である。そう言う彼も今は

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。